

論文内容の要旨

申請者氏名 石倉 健一

論文題目 作業療法士の専門家アイデンティティ尺度の作成

【背景と目的】

一般社団法人日本作業療法士協会は、平成 30 年(2018)の定時役員総会において作業療法の定義を改定した。まさにパラダイムの転換期を迎えたといえる。新定義文では、作業療法の対象や領域が広く捉えられ、作業の定義が追加された。また作業療法の目的や手段が具体的に示されるようになった。定義改定を行った背景には、時代とともに作業療法士に求められる社会的期待や役割の変化に応じたものであった。また時期を同じくして、平成 30 年(2018)には、理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の一部を改正する省令が公布され、令和 2 年(2020)に作業療法士養成校に入学する者より新カリキュラムに移行することとなった。指定規則の改定に伴って、より質の高い作業療法士を養成する仕組みがはじまった。したがって、これから新たに作業療法士を目指す者は、新たな定義や指定規則に則した教育を履修することができるだろう。しかし、すでに養成校を卒業した有資格者にとって、新定義に適応するまでには、一定の猶予期間を要することが予測される。定義の改定に伴う職域の広がりに対応できず、自らの知識や技術に不安をいだく者がいても不思議はないだろう。長谷他(2007)によれば、パラダイムは専門職種の知識と技術の母体となっているという意味で、職業的アイデンティティを産み出すものであるとされる。つまり、定義が改定され新たなパラダイムに転換したことに伴って、一時的に職業的アイデンティティが不安定になってもおかしくない。しかし、アイデンティティ危機をネガティブに捉える必要はなく、それを乗り越えることで、新たな定義が浸透していくことにつながるだろう。

これまでも作業療法士を対象とした職業的アイデンティティ研究が進められ、職業

的アイデンティティ形成に影響を及ぼす要因について検討されてきた。しかし、これらの研究で用いられている尺度は、企業就業者用に作成された職業的アイデンティティ尺度(児玉・深田, 2005a)や学生用に作成された職業的アイデンティティ尺度(藤井他, 2002)がそのまま使用されてきたこと、あるいはその尺度項目にもとづいて改変された尺度が使用されてきた。宮下他(1984)によれば、職業的アイデンティティは、医師や看護師などのように一定の専門教育を経て、特定の領域の専門家として働く人の場合、そうでない人と比べて職業的アイデンティティの構造が異なるとされる。したがって学生を対象として作成された測定尺度をそのまま専門家(臨床家)に用いることは必ずしも適切であるとは思えない(佐々木・針生, 2006)。専門職の職業的アイデンティティを測定するためには、専門職を対象にした研究から開発された尺度が必要であることはいまでもなく、作業療法士の専門性や職域に向けた課題を検証するために必要である。

このように尺度開発が、専門家である作業療法士の職業的アイデンティティの確立にむけた、その教育的示唆を得ること、及び方策に対する効果の判定に用いることができるのは確かである。しかし、これまでの研究で開発や使用されてきた尺度は、その開発プロセスにおいて、限局された分野や地域に所属する方々を調査対象としていること、及び対象者が一般企業就業者や学生を対象としたものであるため、これらの尺度をそのまま利用しても、得られたデータの信頼性の低下は否めないことや、解明された要因が必ずしも作業療法士全体の職業的アイデンティティを反映しているとは言い難く、信頼性や妥当性の検討が不十分な側面が伺えた。

そこで本論文では、作業療法士の職業的アイデンティティの構成概念について検討し、半構造化面接を用いた定性的調査から仮尺度項目を設定した。そして、その仮尺度項目を用いた定量的調査を行い、尺度項目の精選とその信頼性と妥当性の検討を繰り返した。そして、作成された尺度を用いて作業療法士の職業的アイデンティティと関連する要因について検討した。

第1章では、【目的】作業療法(士)の現状について、①作業療法(士)の歴史的変遷と動向、②作業療法(士)の養成教育と卒後教育の観点から論述した。【結果】作業療法士が文化や社会との関係性から、成長や発達する専門職であることが明らかとなった。

第2章では、【目的】アイデンティティの概念について、Erikson(1959)に遡り、その起源と形成過程、そして関連する概念と、それらに関するこれまでの研究について論述

した。【結果】アイデンティティとは、①生涯にわたり発達し、形成されること、②時代の変化に伴う社会構造の変化が生じたとしても、すべての人々の心の発達を探求するうえで欠くことのできない概念であり、特に職業的アイデンティティの確立が重要であることが示唆された。

第3章では、【目的】職業的アイデンティティの位置づけと、職業的アイデンティティ研究の変遷から、医療専門職の職業的アイデンティティについて論じた。【結果】職業的アイデンティティの確立がアイデンティティ全体の形成に重大な意味をもつと捉えられ、特に専門職の場合、職業的アイデンティティの確立が、専門職の質を向上させると考えられ、その研究が進められなければならないことが示唆された。

第4章では、【目的】作業療法(士)領域における職業的アイデンティティ研究の現状について論じた。【結果】職業的アイデンティティの確立が作業療法(士)独自の理論やモデルの構築にもつながることが示された。そして、その職業的アイデンティティを測定する尺度開発プロセスの課題と問題点についてふれた。

第5章では、第1章から第4章までの論考をもとに、本論文の意義と目的についてまとめた。そして本論文における作業療法士の職業的アイデンティティの定義を「自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら見通しをもって粘り強く取り組むことによって、自らの考えや信念に影響を与え、作業療法士固有の職業領域における自分らしさの感覚を形成する過程」と定義した。

第6章では、【目的】作業療法(士)の職業的アイデンティティ尺度開発プロセスに関する示唆を得ることを目的に、医療職の職業的アイデンティティ尺度開発に関連する先行研究を概観し、その内容を分類・整理した。【結果】①職業的アイデンティティの構造をEriksonの自我アイデンティティの感覚を構成する要素である2次元4象限をもとに、藤井他(2002)が示した職業的アイデンティティの構造に照らし検討すること、②尺度開発において、適切な信頼性と妥当性の検証のためのプロセスを経ること、③作業療法士の職業的アイデンティティの確立あるいは形成・発達過程などとの関連について検討することの必要性が示唆された。

第7章では、作業療法士の職業的アイデンティティ測定尺度の開発について論じた。第1節では、【目的】作業療法士の職業的アイデンティティへの影響要因を検討するため、藤井他(2002)の尺度を用いて行った予備調査について論じた。【結果】社会的ス

キル、職務満足、仕事へのモチベーション、年齢、職位、職業モデルの影響が示唆された。そして、作業療法士独自の職業的アイデンティティ尺度作成が課題としてあげられた。第2節では、【目的】第1節の課題をうけ、半構造化面接を用いた定性的研究手法を用いて、作業療法士の職業的アイデンティティの構成要素について検討した。【結果】8項目100コードを抽出した。第3節では、【目的】第2節で抽出された100コードを用いて、定量的調査を試み、因子構造について探求した。【結果】4因子24項目からなる試作版を作成したものの、妥当性や信頼性の検討が課題であった。第4節では、【目的】第3節で作成した試作版を用いて、定量的調査を行い、その妥当性の検討を行った。【結果】4因子16項目からなる作業療法士の職業的アイデンティティ尺度が完成し、その妥当性が確認された。しかし、本尺度の有用性の検討が課題としてあげられた。

第8章では、作業療法士の職業的アイデンティティ尺度の下位4因子について、作業療法(士)の専門性(独自性・自律性)という観点から考察した。

以上のことから、本論文では、作業療法士の職業的アイデンティティを測定する4因子16項目からなる尺度が作成された。本尺度は、藤井他(2002)が示した職業的アイデンティティの構造と、Erikson(1959)の自我アイデンティティ論に基づいた内容であり、作業療法士の職業的アイデンティティ測定尺度としての妥当性の高い尺度であった。

本論文は、一貫して臨床に従事する作業療法士を対象とした定性的及び定量的な調査や分析を行い、構成概念妥当性の検討を繰り返し、その妥当性の検討を重ねた。この点において、作業療法士の専門性を反映する職業的アイデンティティ測定尺度として唯一の尺度であると考えられる。

発表論文：

石倉健一(2018) 作業療法士における職業的アイデンティティとキャリア・アダプタビリティの関係. 日本作業療法研究学会雑誌, **21(1)**, 11-16.

石倉健一(2020) 作業療法士の職業的アイデンティティ測定尺度開発の試み. 日本作業療法研究学会雑誌, **23(1)**, 1-8.

石倉健一, 三宅俊治(2019) 作業療法士の専門家アイデンティティ形成に及ぼす要因の検討. 吉備国際大学心理・発達総合研究センター紀要, **5**, 11-22.

氏 名	石倉 健一
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	甲第心2-6号
学位授与の日付	令和3年3月22日
学位授与の要件	学位規程第4条第3項該当（課程博士）
学位論文題目	作業療法士の専門家アイデンティティ尺度の作成
論文審査委員主査	森井 康幸
副査	三宅 俊治
副査	原田 和宏
副査	田尻 直輝
<p>審査結果の要旨</p> <p>本研究は、医学・医療技術の進歩、健康の維持・増進問題、ひいては地域再生などの変化にも対応した社会貢献が可能となる専門職としての作業療法士養成の支援のための職業的アイデンティティ尺度の作成を目指したものである。同時に、多職種連携・協働が求められるなかでの、作業療法士の「独自性」の明確化も重要な視点となっている。</p> <p>論文の査読評価としては、まず第1に論文タイトルと本文中の用語使用の不一致の問題が指摘された。次に、全体として問題・目的、方法、結果、考察などが論理的に有機的に論述されているとはいえないとの指摘が多かった。『問題・目的』に関連して、作業療法士を取り巻く社会情勢から職業的アイデンティティ研究の意義についての脈絡が不明確であり、そこでのアイデンティティ研究（既存の尺度）に関する先行研究の吟味が不十分なまま、独自の尺度作成へと展開されている。アイデンティティ尺度づくりに関しては、教科書通りの手順に則り作成されており、表面上は問題ないといえる。ただし、作成されたものが専門職としての職業的アイデンティティ尺度といえるのかどうかについてはさらなる検討の必要があるように思われた。また、4項目（あるいは6項目）ずつから構成される4因子構造の尺度という形式的な美しさを追求したかのような印象も気になるところであった。「作りたいものを作ったというように見える」という指摘もあった。さらには、この尺度が当初の目的であった専門職としての作業療法士の養成にどのように利用可能なかについての言及が不十分だと思われる。</p> <p>発表・口頭試問においては、簡潔で分かりやすい発表・説明にはなっていなかったが、質問への回答は適切なものといえるものであった。</p> <p>以上のような問題点が指摘されたが、著者の文書表現上の問題を改善することで、課題や最終目的、新奇性などは明確化されるものと思われ、また今後の継続的研究における発展性も期待される。</p> <p>論文の評価としては、審査者4人の全員が5段階評価（A～E）のC評価であり、口頭試問においても、4人全員が「良」評価であり、本審査委員会は一貫して、本論文が博士（心理学）の学位を授与するのに値するものと評価した。</p>	

[第20条様式：A4判]